小田原の遺跡探訪シリーズ20

小田原城本丸・二の丸

―遺跡からたどる場の変遷―

小田原市教育委員会

例　　言

1　本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」第20号として作成しました。

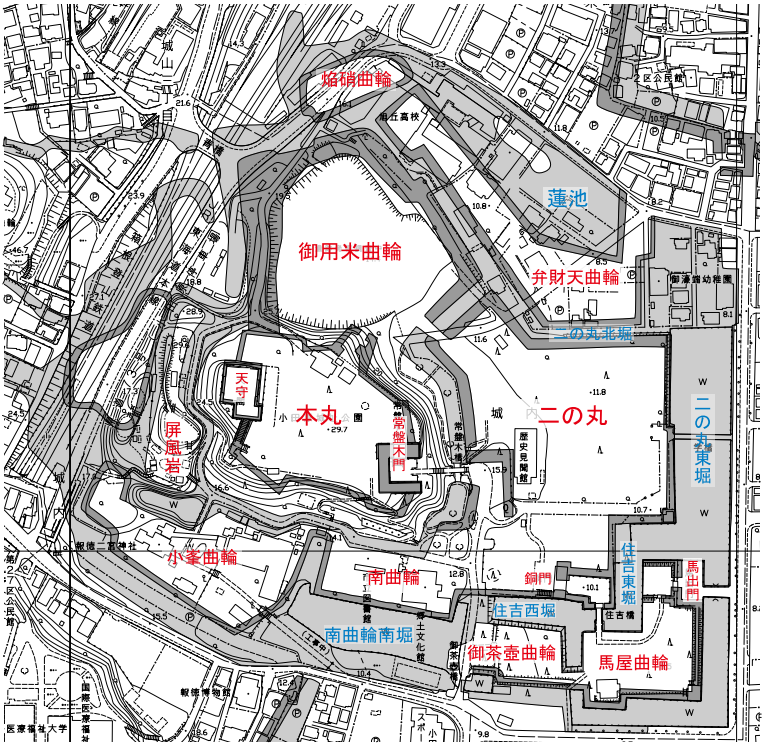
2　今号では「小田原城本丸・二の丸」として、発掘調査の成果を中心に、小田原城本丸・二の丸について紹介します。第15号「総構」、第18号「小田原城とその城下」および第19号「小田原城三の丸」と合わせ、小田原城周辺の遺跡散策の参考にご活用ください。

3　本文中で使用する本丸、二の丸とは第１図に示した範囲であり、『小田原市史 別編 城郭』を基準に近世小田原城の呼称における近世の本丸、近世の二の丸、および近世の二の丸関連諸曲輪（馬屋曲輪、御茶壺曲輪、御用米曲輪など第１図の赤字の曲輪）を指します。

4　本書の刊行は、令和6年度国庫補助事業である「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」の一環として行いました。

5　本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
小田原市立中央図書館、小田原城総合管理事務所、宮内庁書陵部、大貫みあき

6　本書の作成は、小田原市文化部文化財課　田中里奈が担当者となり、同課湯浅浩・佐々木健策・土屋了介・小此木健・早野路子・中村聡の協力を得ました。



第１図　本書に登場する小田原城本丸・二の丸・二の丸関連諸曲輪の遺構名称（『小田原市史 別編 城郭』による）

［表　紙］　小田原城址公園の全景
［裏表紙］　御用米曲輪で出土した三ツ葉葵紋をもつ軒丸瓦

Ⅰ　小田原城の立地と成り立ち

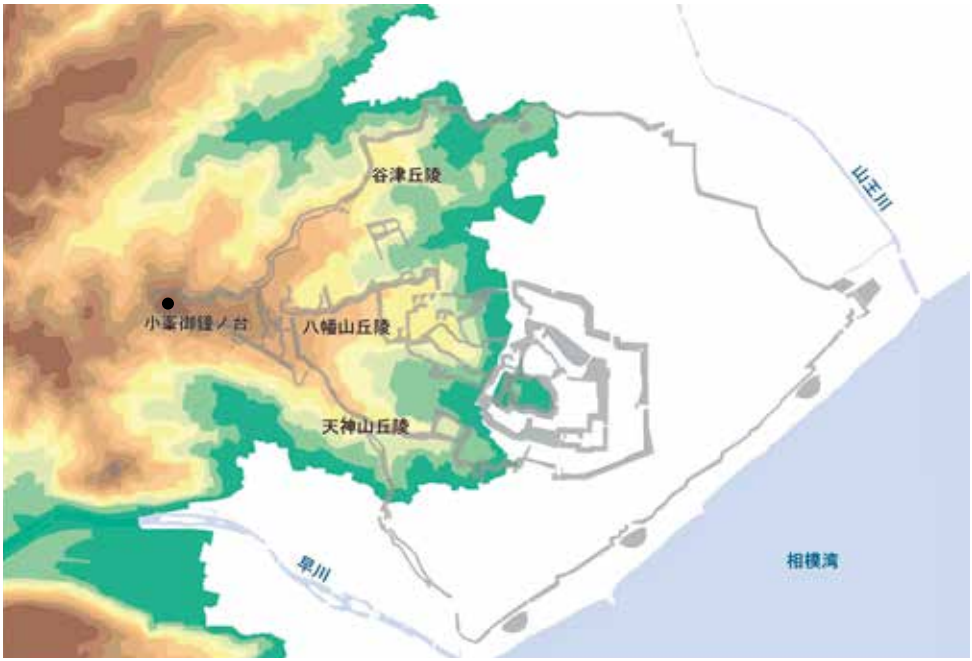
1　小田原城の立地と環境

小田原城は、小田原市の西部、箱根外輪山から東に延びる丘陵の先端部に位置し、南西に早川、北東に山王川・酒匂川が流れ、南は相模湾に面しています（第２図）。

城域は、小田原城の西端にあたる標高123.8mの小峯御鐘ノ台（こみねおかねのだい）を頂点として派生する３本の丘陵（北から谷津丘陵、八幡山丘陵、天神山丘陵）と、相模湾に面した標高10m前後の沖積低地から成り、天正18年（1590）の小田原合戦までには、これらを堀と土塁からなる全長約９㎞にも及ぶ総構（大構）が取り囲んでいました。

このように、小田原城は自然地形を巧みに利用して築かれました。

今号では、小田原城域のうち、第１図に示した範囲を紹介します（第１図）。



第２図　小田原城と周辺の地形

２　戦国時代以前の小田原城

小田原城が築かれたのは室町時代であると考えられていますが、それよりもはるか昔からこの場所には人々が生活し、その痕跡が見つかっています。

御用米曲輪では、八幡山丘陵先端部の北側斜面から石核（せっかく）が出土しました（写真１）。出土した層は地すべりにより本来の位置からずれていると考えられますが、石核の形から38,000年～16,000年前の旧石器時代のものと考えられます。ほかにも縄文時代中期初頭（約5,000年前）の五領ヶ台（ごりょうがだい）式土器、中期中葉の勝坂（かつさか）式土器、中期後葉の曽利（そり）式土器や弥生土器が出土しました。また縄文時代の層から、漁に使用する網に付ける重りである土錘（どすい）が出土し、当時はこの場所に漁をしながら暮らす人々がいたことがわかります。古墳時代から奈良・平安時代の遺跡としては、住居跡や土師器の甕が見つかったほか、灰釉陶器（かいゆうとうき）も出土しています。

写真１　御用米曲輪出土石核

写真２　住吉堀出土木製容器

住吉堀周辺でも、縄文時代から平安時代の遺跡が見つかりました。発掘調査では住吉堀の南側に、縄文時代前期までに形成された標高８m前後の低湿地が広がり、そこに八幡山丘陵から延びる尾根が舌状に突き出している状況を確認しました。この低湿地の上に形成された黒色粘土層からは、縄文時代中期初頭の五領ヶ台式期の縄文土器や木製容器（写真２）が見つかっています。なかでも木製容器は、土の重みでつぶれているものの形がよく残っており、黒漆が塗られた胴部に赤漆による線が描かれています。このほか、住吉堀の堀底でも平安時代の住居跡や灰釉陶器が見つかっています。

このように、御用米曲輪や住吉堀などの八幡山丘陵の麓で、旧石器時代から平安時代にかけての小規模な遺跡が展開していました。しかし、これ以降戦国時代に至るまで、ここ一帯に遺跡の存在は確認できなくなります。

３　小田原城における発掘調査のあゆみ

小田原城は、昭和13年（1938）に二の丸及び三の丸・総構の一部が、昭和34年に本丸と残る二の丸の大半が国の史跡に指定されました。

昭和46年、近世本丸・二の丸における史跡整備のための基礎的な調査として、小田原城で最初の発掘調査が行われました。調査では本丸の東斜面と堀の一部、本丸の北側にあった鉄門（くろがねもん）跡の外側にトレンチが設けられ、階段状遺構、暗渠の石組水路（写真３）、石垣の裏込石や角石などを検出しました。また、昭和52年に銅門（あかがねもん）、昭和53年に住吉橋で行った調査では、部分的な確認調査ながら、銅門の遺存状態や住吉橋と銅門の位置関係を明らかにすることができました。

写真３　鉄門跡の石組水路

その後、全国的に城郭の整備事業が進められていくなかで、小田原城においても本丸・二の丸のうち史跡指定地の部分を近世末期の縄張りで復元整備するという基本方針が出され、整備のための発掘調査が始まりました。

この基本方針に基づいて昭和57年に御用米曲輪で行われた調査では、江戸時代の蔵跡が見つかったほか、トレンチ調査では中世から近世までの地業層（じぎょうそう）が確認されました。これにより小田原城における遺構の変遷が発掘調査を通して確認できることが明らかとなり、小田原城の考古学的調査に対する期待が高まりました。

翌58年には、大正12年（1923）の関東大震災で崩れた住吉堀の石垣と堀を近世の姿に復元するための発掘調査が始まりました。住吉堀の調査では、10年にわたる発掘調査で検出された遺構や遺物と、文献資料、絵図との相互検討により、住吉堀一帯の変遷過程が明らかになりました。

その後、平成９年（1997）および10年には、二の丸御屋形跡（おやかたあと）の遺存状況の確認調査、平成12年に馬屋曲輪、平成15年に馬出門で整備に伴う発掘調査が行われ、調査成果をもとに近世城郭の姿が復元されました。そして御用米曲輪では、平成22年から発掘調査が始まり、重要な遺構の発見が続いています。このような発掘調査を通じて小田原城の歴史が少しずつ明らかになっています。

コラム　小田原城の中世の板碑

板碑は、中世に造立された供養塔の一種です。板碑には、死者の菩提を弔う追善供養のためのものと、生前に自らが極楽往生を願って建立した逆修供養のためのものなどがあります。

関東地方には、「武蔵型板碑」と呼ばれる埼玉県西部で産出する緑泥石片岩を用いた板碑が約５万基分布していますが、小田原市域には１基もありません（後世に持ち込まれたものを除く）。一方で、市内には「安山岩製板碑」が７基分布しています。このうち、年号のあるものは文保元年（1317）～康永元年（1342）の中に収まるため、この時期に限定的に作られたものと考えられます。

「安山岩製板碑」のうち、東京国立博物館所蔵の板碑（写真４）は城山で出土したもので、城内に所在する市指定板碑（写真５）と御用米曲輪で出土した２基（写真６）の合わせて４基の板碑が、八幡山周辺に分布していたということになります。このことから、これらの板碑は14世紀前葉に八幡山に建てられた可能性が高いと言えます。

板碑は、景勝地や見晴らしの良い場所に建てられることが多いため、小田原城築城以前の八幡山周辺の景観を考えるヒントとなります。

写真４　東京国立博物館蔵
阿弥陀三尊種子石塔婆

写真５　市指定小田原城内
大日一尊種子板碑

写真６　御用米曲輪出土
金剛界大日・阿弥陀三尊種子板碑

Ⅱ　戦国時代の小田原城

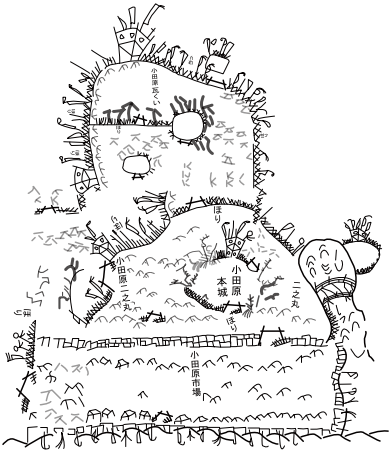
1　文献史料から垣間見える戦国時代の小田原城

小田原城が歴史の表舞台に登場するのは、戦国時代に入ってからです。戦国時代の小田原城は、江戸時代の小田原城と同じ名前で、同じ場所に存在していますが、後述するように異なるお城と考える必要があります。戦国時代の小田原城は江戸時代の小田原城により上書きされており（佐々木2024）、その姿はよくわかっていないためです。戦国時代当時に戦国時代の小田原城の景観について書かれた史料はほとんどありません。江戸時代に記された史料の中には戦国時代の小田原城について触れられているものはありますが、それはあくまでも江戸時代の史料であり、正確な戦国時代の小田原城の姿を述べたものとは限りません。

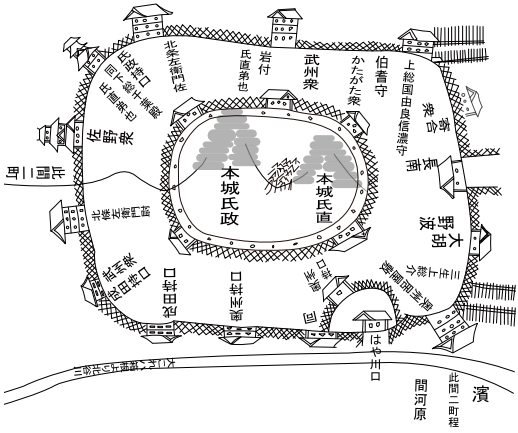
そのような中で、天文20年（1551）、京都南禅寺の僧東嶺智旺（とうれいちおう）が『明叔録（みんしゅくろく）』に残した記録は、数少ない戦国時代の小田原城の姿について触れた史料です。

「（前略）太守墨、喬木森丶、高館巨麗、三方有大池焉、池水湛丶、浅深不可量也（後略）」

太守（北条氏康）の館には高木が生い茂り、城郭は巨麗にして三方を大池に囲まれ、池は深浅をはかれないほど水を湛えているという意味で、三方の大池とは、蓮池を含む近世二の丸東堀や南曲輪南堀の前身と想定されます。つまり、大池に囲まれた



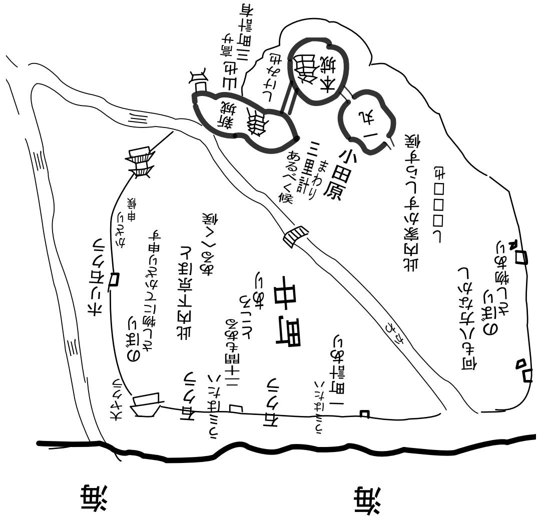
第3図　「小田原陣仕寄陣取図」トレース図（佐々木2024より）



第4図　「小田原陣仕寄陣取図」小田原城部分トレース図（佐々木2024より）

高館についての記述こそが本書で扱う近世の本丸・二の丸範囲における、戦国時代の景観を述べた記述と考えることができます。

また、天正18年（1590）に小田原城を攻めた豊臣秀吉軍は、小田原城を攻める軍勢の様子を示す「小田原陣仕寄陣取図」「小田原城仕寄陣取図」（以下「仕寄図」）を作成しました。「仕寄図」は複数確認できますが、そのうち山口県文書館に所蔵されている毛利家伝来の「仕寄図」から、当時の小田原城の景観を探る手掛かりが得られます（第３～５図）。



第５図　「小田原城仕寄陣取図」トレース図（佐々木2024より）

第３図の「仕寄図」からは、「ほり」と２つの門を持つ柵に囲まれた空間に「本城」と櫓が１つあり、その東西に「二之丸」が位置している様子が見て取れます。第４図の「仕寄図」からは、「本城氏政」「本城氏直」という２つの主郭が存在したことがうかがわれます。描かれ方から、「本城氏政」が八幡山、「本城氏直」が近世本丸の位置にあたると想定されます。また、第５図の「仕寄図」からは、「一丸」「本城」「新城」の３つの曲輪から成る小田原城の様子が確認できます。この３つの「仕寄図」は、戦国時代の小田原城の様子を図で示した数少ない史料です。

また、寛文12年（1672）に作成された『足柄下郡板橋村明細帳』の記述になりますが、「石蔵長三間横弐間半程之由申伝候、（中略）右之蔵七本松北之方ニ御座候よし申候」という記述があり、七本松の北方に長さ三間、幅二間半程の石蔵があったことをうかがわせます。ここにある「七本松」の一本が、現在も本丸に残る市指定天然記念物の「巨松」です。

２　戦国時代の小田原城の姿

実は、戦国時代の小田原城は小田原合戦後も継承されていました。小田原合戦終結から７ヶ月後、上洛の途中で小田原に立ち寄った伊達政宗は、「（小田原城の）要

害ぶりは言葉を失うほどであった。兵粮・兵具の蔵も十分で、何事にも不足はない。それでも戦に敗れてしまったのはどうしようもないことである。自分はこの様子を見て、その威容に驚嘆するばかりであった。」と感想を述べています。

そのような小田原城の姿は、寛永10年（1633）に発生した寛永小田原大地震により失われました。この地震の被災と復興を経て、小田原城は石垣に白亜の天守が聳（そび）える近世城郭へと生まれ変わりました。特に本丸は徳川将軍家用の宿所として、二の丸は小田原藩主の宿所として再整備され、御用米曲輪では約１ｍの盛土により埋め立てられたことで、曲輪の景観は大きく改変されました。これにより本丸・二の丸周辺の戦国時代の小田原城の姿は完全に失われてしまったと考えられます。

したがって、確実な戦国時代の小田原城の姿は地下に埋まり、発掘調査でしか確認できない状況となりました。そのため、戦国時代の小田原城を発掘するには、その遺跡の上にある江戸時代の小田原城を取り除かなくてはいけないという状況にあります。しかし、江戸時代の小田原城も国指定史跡として大切に守り伝えていく遺跡であるため、戦国時代の小田原城を探る機会は大変少なく、後述する御用米曲輪の発掘調査成果などは、戦国時代の小田原城を考えるうえで貴重な発掘調査事例となります。

３　発掘調査から垣間見える戦国時代小田原城

前述でも紹介したように、戦国時代の小田原城の痕跡を確認するには、多くの課題があります。そのような中で、断片的ながらも発掘調査で垣間見えた戦国時代の小田原城の姿を紹介します。

江戸時代の小田原城とは異なる堀

銅門・住吉堀周辺の発掘調査では、戦国時代の堀や井戸などを検出しました。検出した堀は堀底に一定の間隔で堀障子（ほりしょうじ）と呼ばれる障壁を掘り残した障子堀（しょうじぼり）で、北条氏が多く用いた堀です。江戸時代の住吉堀の下層で、南北２列で続いている様子（写真７）が確認されたほか、銅門の西側や御茶壺曲輪（おちゃつぼくるわ）でも見つかりました。

写真７　住吉堀で見つかった戦国時代の障子堀

発見された障子堀は、上半部は江戸時代の住吉堀により削られていますが、堀の法面（のりめん）と底面、堀障子との境は明瞭シャープに仕上げられており、16世紀後葉に北条氏が築いた堀の特徴が確認できます。

このほか、御用米曲輪の発掘調査でも障子堀が確認されているほか、近世本丸との間では堀が見つかっています。また、二の丸御屋形跡の試掘調査でも戦国時代の堀の痕跡が確認されています。これらの堀は江戸時代以降の絵図には描かれておらず、また江戸時代以降の縄張りでは想定できない位置にあり、出土遺物などからも戦国時代の堀であることが明らかです。同様の堀は、三の丸や城下でも確認されており、戦国時代の小田原城の縄張りは江戸時代の小田原城の縄張りとは異なっていることを示しています。

戦国時代の小田原城の曲輪取り

馬屋曲輪では、第一地業面とよぶ16世紀の遺物が出土する整地層が形成されており、その上に１ｍ程度の盛土を行い、生活面を形成していました。この面で見つかった石組水路からは16世紀後葉の陶磁器やかわらけが出土していることから、16世紀の馬屋曲輪一帯には、障子堀を備えた曲輪が存在していたものと想定されます。

御用米曲輪と本丸の間にも幻の曲輪があったと考えられています。発掘調査では、前述のように本丸と御用米曲輪との間で堀が見つかっていますが、この堀から北東に28mの位置までは戦国時代の遺跡がまったく見つかっていない空白地となっており、江戸時代の遺跡がわずかに分布するのみです。このことから、戦国時代には御用米曲輪と本丸の間に失われた曲輪が存在し、この曲輪を削平して江戸時代の御用米曲輪が造成されたと考えることができます。

御用米曲輪下層の調査成果

御用米曲輪ではこれまでに９次の調査が行われており、16世紀後葉の遺構が濃密に確認されています。

石組水路により区画された空間に礎石建物が分布し、切石敷遺構（庭園）や池などが確認されています（写真10）。切石敷遺構や池は、鎌倉石と風祭石の切石、安山岩製の石塔部

写真８　武家儀礼に用いられ廃棄されたかわらけ

材を多用し、モザイク模様のように配置した特異なもので、当時の一般的な作庭手法とは異なっています。また、儀式・宴会に用いるかわらけが多量に出土している状況（写真８）や金箔かわらけの出土（写真９）は、戦国時代の御用米曲輪が特別な場所であり、武家儀礼を行う中心的な空間であったことを示しています。このような様相は、一乗谷朝倉氏遺跡の朝倉義景館（福井県福井市）や豊後府内大友氏館（大分県大分市）などで確認されているような大名居館に匹敵するものです。

御用米曲輪の発掘調査はこれからも続くため、評価はまだ定まりませんが、16世紀後葉という時期と特異な遺構の様相、多量のかわらけの出土状況を踏まえ、現在のところ、この居館跡の主は北条氏四代当主北条氏政だったのではないかと推定されています。

写真９　御用米曲輪で出土した金箔かわらけ

写真10　御用米曲輪で検出した切石敷遺構の庭園

Ⅲ　江戸時代の小田原城

江戸時代の小田原城にはいくつかの画期があります。その画期は、天正18年（1590）に城主となった大久保忠世（ただよ）とその息子忠隣（ただちか）の時代である「前期大久保時代」、慶長19年（1614）に忠隣が改易され城代が置かれた「番城時代」、寛永９年（1632）に稲葉正勝が城主となって以降の「稲葉時代」、そして貞享３年（1686）に再び大久保氏が城主となり明治維新にいたるまでの「後期大久保時代」の間に設定することができます。また、小田原城は、寛永10年の寛永小田原大地震による被災と復興、翌11年に予定されていた三代将軍徳川家光の上洛に向けた整備工事により、戦国時代から江戸時代の小田原城へと大きく変貌を遂げます。この近世化工事により、現在見られる城跡の姿が形成されるため、ここにも画期が設定できます。

ここでは、本丸・二の丸の様子および大手登城ルートに位置する曲輪・施設について、発掘調査成果を含めて紹介します。

第６図　通称「宮内庁図」に描かれた本丸
（宮内庁宮内公文書館所蔵）

１　本丸

近世小田原城の主郭である本丸は、東西150m、南北114mほどの広さをもつ曲輪です。第６図に示した『小田原城廓総図』（通称「宮内庁図」）などの江戸時代の絵図によると、本丸東側には、南北に多門櫓（たもんやぐら）を備えた常盤木門（ときわぎもん）が正門としての威容を誇っていました。北側には裏門にあたる鉄門があり、曲輪外周には鉢巻（はちまき）石垣（いしがき）の上に漆喰塀（しっくいべい）がめぐっていたようです。本丸中央には本丸御殿、西側には天守が建

ち、南東には石囲いの中に戦国時代以来の七本松がありました。

本丸の様子は、寛永小田原大地震の翌年に上洛する三代将軍家光が、小田原城を訪れた際の様子を記す「稲葉氏系譜」からもうかがえます。家光は、この時に本丸御殿に止宿し、天守に登って飾られていた武器を見学したほか、天守からの眺望を楽しんだようです。この記録から、この時点で天守や本丸御殿など本丸の主要施設が震災から復興していたことがわかります。

小田原城のシンボルでもある天守は何度か建て直されており、古くは北条時代から存在したとも考えられています。前述の「仕寄図」にも櫓の姿が描かれているほか、榊原家には「分捕小田原城ニ而、北条氏直天守二重目有之由」との付箋がある伝来品の銅鑼があります。明治４年（1871）に天守を解体した際、天守屋根から下ろした銅製の鯱には「天正八年（1580）」との年号が刻まれており（中野1968）、「北条氏直天守」の存在をうかがわせます。その後、天守は地震による倒壊と再建を繰り返し、望楼型天守（通称「加藤図」）から層塔型天守（通称「正保図」）、層塔型天守（通称「文久図」）へと変遷したと考えられています。

最後の天守は、明治４年に解体されました。その後、昭和35年（1960）に鉄筋コンクリート造天守閣として復興します。正確な天守の記録は失われていたため、復興にあたっては大久保神社および旧東京大学所蔵の天守模型、「天守引図」、解体時の写真（写真27）などが根拠資料とされました。天守閣の全体的な意匠は旧東京大学所蔵の天守模型、平面規模は大久保神社所蔵の天守模型、高さは２つの天守模型の中間が採用されました。

なお、この復興工事の過程で、現在の天守台の中から昔の天守台の石垣と推定される石積みが姿を現しました（写真11）。このことからも、現在の天守台に先行する天守

写真11　初期天守台の石垣

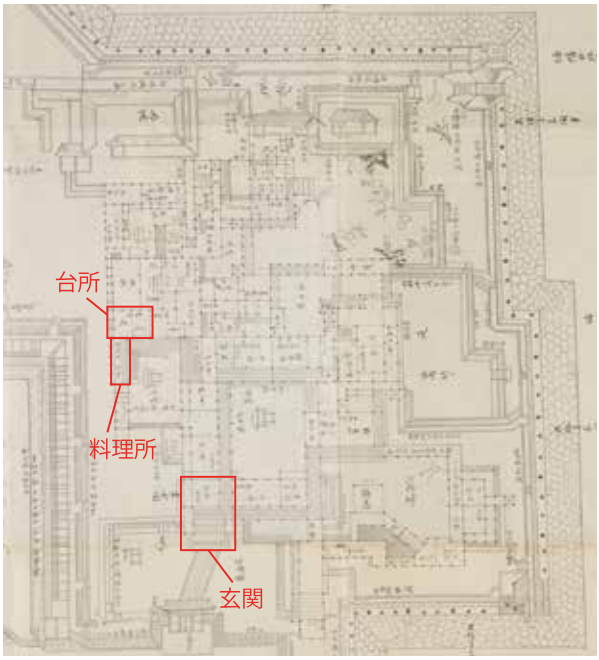
写真12　七本松の囲いにあたる石組遺構

台があり、古い天守が存在したことは間違いないと言えるでしょう。

本丸御殿は、一般的には藩主の宿所や藩の政治を行う政庁です。しかし、小田原城の本丸御殿は将軍家用とされ、小田原藩主は二の丸御屋形を拠点としました。本丸御殿には徳川家康、二代秀忠、三代家光が止宿し、その回数は15回を超えています。本丸御殿は、元禄16年（1633）の元禄小田原大地震によって焼失しますが、将軍家の上洛も途絶えたことから再建されることはありませんでした。

写真13　本丸で採集された軒丸瓦

本丸における発掘調査は、これまでに4次行われています。いずれも調査範囲の狭い試掘調査ですが、近世の本丸整備に伴う盛土層である地業層や、七本松を囲っていた石組遺構を検出したほか（写真12）、天守台石垣周辺で行った試掘調査では三ツ葉葵紋軒丸瓦（写真13）が出土しました。三ツ葉葵紋は徳川家の家紋であることから、小田原城が徳川将軍家の城であることを物語る瓦と言えます（小田原城天守閣2016）。



第７図　通称「宮内庁図」に描かれた二の丸の御屋形

２　二の丸

二の丸には、小田原藩主の御殿であり、藩の政庁でもある二の丸御屋形がありました。二の丸御屋形がいつから存在していたかは明らかになっていませんが、「新編相模国風土記稿」には慶長19年（1614）、二代秀忠が小田原城に到着し、二の丸に宿泊したとの記録があることから、この頃には存在していたと考え

られます。

二の丸御屋形は、三代将軍家光の上洛の際には将軍の御成に備えて唐門や能舞台などを設えていました。元禄年間（1688～1704）には東西83.3m、南北117.7mの規模となり、御歩行長屋（下級藩士の宿所）や総二階の馬屋もあったとされますが、元禄16年の元禄小田原大地震による焼失を機に、位置をずらして建て替えられました。

写真14　江戸時代前期の御屋形玄関口

二の丸においては、何箇所かのトレンチを設定した範囲確認調査を実施しました。二の丸御屋形西端に相当する位置のトレンチでは、礎石や切石列が見つかり、擂鉢などの調理具が出土しました。通称「宮内庁図」と照合すると、おおよそ台所から料理所にかけての場所にあたるようです（第７図）。また、二の丸御屋形玄関口にあたる場所では、側面に切石を並べ、砂利を敷き詰めた水路が良好な状態で見つかっており（写真14）、現在の二の丸の下には二の丸御屋形の遺構が良好に残っているものと考えられます。

３　大手登城ルートを探る

馬出門

馬出門から馬屋曲輪、住吉橋を渡って銅門を経て二の丸、そして本丸へと至るルートが小田原城の正規登城ルートです。馬出門は二の丸の入り口にあたり、石垣と土塀からなる桝形と高麗門形式の冠木門と内冠木門からなる枡形虎口で構成され、稲葉正勝による小田原城の近世化工事で整備されました。その後、寛文12年（1672）から延宝３年（1675）頃までに、馬出門土橋の際にあった門が、城内方向へ後退し、現在のような門と土橋の間に空間を持つ形態へと変

写真15　御用邸時代の馬出門

更されました。それ以降、数度にわたる地震の被害を受けながらも門は大きく改変されることなく、明治3年(1870)に解体されました。

明治34年、二の丸に御用邸が建てられると(写真15)、それに合わせて馬出門では門の位置の変更や石垣のかさ上げなどが行われました。発掘調査では、江戸時代の馬出門の控柱・鏡柱の礎石の抜取り跡が、御用邸時代の門の鏡柱・脇柱の基礎の位置とは違う位置で見つかり、御用邸時代に門の南側石垣が約2.3m南に、北側石垣が約0.6m南に移動している状況が明らかになりました(写真16)。また、石垣は関東大震災で大半が崩れましたが、発掘調査の結果、枡形部分の一部の石垣は根石(石垣のうち最も下の石)から最大で3石目まで江戸時代の石垣が残っていることがわかりました。

写真16　馬出門枡形で検出された石垣

馬屋曲輪

馬出門をくぐると、馬屋曲輪です。馬屋曲輪は本丸・二の丸への大手筋に位置しています。かつて曲輪の外周には石垣がめぐり、その上には漆喰塀がありました。曲輪内部には砂利が敷かれ、馬を繋ぐための馬屋、馬を引く従者が待機する大腰掛のほか、曲輪の南東隅に二重櫓があり、番所や井

写真17　馬屋跡で検出された石列

戸、水溜などもありました。小田原藩主・藩公用の馬屋は二の丸にあることから、馬屋曲輪の馬屋は将軍家用の施設であったと考えられます。

馬屋曲輪の発掘調査では、通称「宮内庁図」から推察される位置で馬屋跡の縁石と考えられる石列（１号石列）と、その内側で建物の基礎と考えられる石列（２号石列）を検出しました（写真17）。通称「宮内庁図」には、馬屋の規模は21間×3間半と書かれており、検出された礎石や石列などの位置と照合すると、馬屋跡の位置は概ね確認することができたと言えます。また、馬屋跡の北東隅からは鐶付（かんつき）の座や小鉤（こはぜ）などの武具に関する銅製品が集中して出土しています。

写真18　切石敷の井戸

大腰掛跡は遺構の残りがあまり良くありませんでしたが、建物の礎石や雨落石と考えられる石列などを検出しました。馬屋跡も大腰掛跡も、元禄小田原大地震で焼失しますが、それを示すように焼土集中や焼けた瓦を検出しました。

また、通称「宮内庁図」に描かれていた位置で検出した井戸は、表面に厚さ約10cmの板状に加工した溶結凝灰岩（風祭石）の切石を敷き詰めたもので、外側は円形、内側は六角形になっていました（写真18）。その形状から、特別な井戸であったと想定されます。

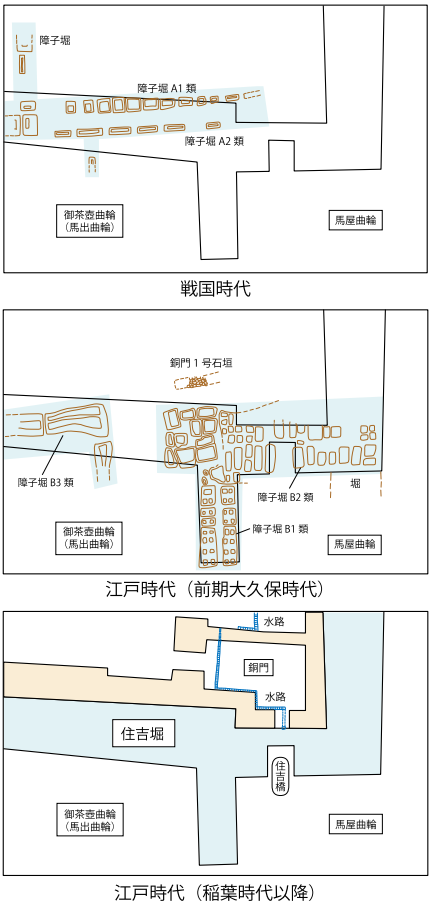
これらの建物跡や井戸跡は、史跡整備により、馬屋曲輪に表面表示されています。

銅門と住吉堀

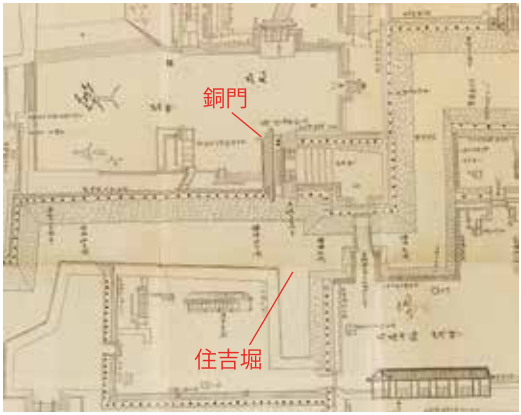
馬屋曲輪から住吉堀にかかる住吉橋を渡ると、二の丸の正門にあたる銅門があります。銅門をくぐると二の丸御屋形に至ることから、銅門は堅牢な櫓門となっていました。

銅門・住吉堀一帯で行われた発掘調査の結果、検出された遺構の年代は、戦国時代、前期大久保時代、稲葉時代以降という大きく３時期で捉えられています。このうち戦国時代の様子については第Ⅱ章で紹介したため、ここでは江戸時代の様子を紹介します。

前期大久保時代の遺構としては、堀と石垣があります（第８図中段）。堀は、戦



第 8 図　住吉堀の変遷
（小田原市 1995に一部加筆）



第 9 図　通称「宮内庁図」銅門・住吉堀

写真19　発掘調査で見つかった銅門・住吉堀の曲輪取り

国時代の障子堀を一部破壊していたり、強引に接続させたりしながら転用されるなど、戦国時代の縄張りを継承しつつ改変している様相が垣間見えました。前期大久保時代の堀の形状も障子堀でしたが、戦国時代の障子堀と比べると堀の一つ一つの規模が不規則で、掘り方も粗雑でした。

また、前期大久保時代の堀に伴う石垣は、稲葉時代の遺構よりも約5m北側で検出されました。このことから、前期大久保時代と稲葉時代の住吉堀は、やや位置が

異なっていたことがわかりました。

稲葉時代に行われた小田原城の近世化工事では、前期大久保時代の堀などを埋め立てて新たな縄張りが作られ、銅門や住吉橋が整備されたと推察されます。検出した遺構の位置は、通称「宮内庁図」に記された位置とほぼ一致していました（第９図・写真19）。このほか、崩落していた石垣を取り除きながら調査を行ったことで、石垣の構築方法も確認できました。

石垣を築く際には、まずその場所を奥行き３～４ｍ掘削し、底に幅45㎝前後に加工した土台木を（松丸太）を繋いで敷き、石垣の基礎とします（枕胴木）。その上に石を積み上げながら、背後に直径30㎝程度の栗石を裏込石として詰めていたようです。住吉堀の石垣には、小口面が約70㎝四方、奥行が100㎝内外の安山岩の切石が使われていました。これらの成果により、住吉堀および住吉橋、銅門の復元整備が実施できました。

御用米曲輪

江戸時代の御用米曲輪は、Ⅱ章で述べた北条家当主クラスの居館が存在した空間から一変し、幕府天領より納められた米である「御用米」を収める蔵が置かれた重要な曲輪となりました。御用米曲輪への入口は、本丸から通じる鉄門と二の丸から通じる相生橋（羊橋）の２箇所のみであり、閉鎖性の強い曲輪でした。

通称「文久図」などでは、御用米曲輪には蔵と考えられる桁行の長い建物が描かれています。蔵は平場で３棟、北東土塁上に３棟描かれており、発掘調査でもほぼ絵図のとおりの位置で遺構を確認しました。平場で検出した３棟の蔵跡は、いずれも京間で桁行15間梁行３間（29.6m×5.9m）で、人頭大の円礫を敷き詰めた布基礎状の基礎構造を呈していました（写真20、佐々木ほか2016）。

御用米曲輪では、蔵跡のほかにも建物の遺構が確認されています。曲輪の西端では瓦積塀が見つかりました（写真21）。塀は土と破砕した平瓦を積み重ねて構築されており、下半部は建った状態で埋没していました。塀に含まれる瓦の年代から、元禄小田原大地震以後に築かれたと考えられます。瓦積塀は現存する近世小田原城の貴重な建造物であることから、埋め戻して保護したうえで、検出した場所に検出時の姿をレプリカで示しています。

なお、御用米曲輪では120点を超える三ツ葉葵紋を持つ軒丸瓦や鬼瓦が出土したことも注目されます。中でも調査区北側の128号土坑からは69点もの三つ葉葵紋軒

丸瓦が出土しました。直径20.3cmという大判の軒丸瓦は、本丸で採集されたものの中に同じものが多いことから、天守で使用されていた可能性があります。三ツ葉葵紋瓦は御用米曲輪が徳川将軍家との関係を持つ重要な空間であった事を伝えるものです。

また「文政四年辛巳歳」「河州交野郡私部村」「御領分摂州住吉」などの刻印がある瓦（写真22）も出土しています。これらは河内国交野郡私部村（大阪府交野市）や摂津国住吉（大阪府大阪市）で焼かれた瓦で、私部村は元禄７年（1694）、住吉は文政4年（1821）に小田原藩領となっていることから、同地で文政４年に焼成され、小田原まで運ばれて葺かれたものであることを示しています。

写真20　御用米曲輪の平場で検出された蔵跡（丸で囲った部分）

写真21　瓦積塀と建物跡

写真22　大阪で焼かれた瓦

コラム　小田原城の石はどこから来たの？

小田原市北隣りの南足柄市から伊豆半島にかけては、今でも山中に「矢穴」を穿（うが）った痕跡の残る石が分布している場所があります。これらの「矢穴」の多くは、江戸時代にお城の石垣用石材を採掘した跡です。「矢穴」のある石が分布する石丁場（石材採掘作業所）のなかでも、早川石丁場群関白沢支群（市内早川）は、静岡県熱海市・伊東市の石丁場とともに、江戸城石垣のための石材採掘が行われた遺跡として、国指定史跡となっています。

では、小田原城の石垣石材はどこで採掘されたのでしょうか？

御用米曲輪の発掘調査では、本丸から崩落した石材の中から「三ツ葉柏」の家紋を刻んだ石垣石材が出土しました（写真23・24）。一方、南足柄市の塚原向坂石丁場では、「松平土佐守」の刻書と「三ツ葉柏」の家紋を刻んだ石が見つかっています。「松平土佐守」とは土佐藩二代藩主山内忠義のことであり、「三ツ葉柏」は山内家の家紋です。文献史料からは、「塚原山」が山内家の石丁場であることが確認でき、同じ「三ツ葉柏」紋を刻む石が小田原城で出土したことから、塚原向坂石丁場の石材が小田原城の石垣に使われていたと断定できました。

また、住吉堀の発掘調査では、採取した石材サンプルを神奈川県立生命の星・地球博物館に提供しています。分析して頂いたところ、米神溶岩グループ・江之浦溶岩グループに相当するという成果が得られました。このため、住吉堀周辺の石垣は、早川以南の早川・石橋・米神などの地域で採掘されたものであることが科学的に証明されました。

写真24　「三ツ葉柏」紋

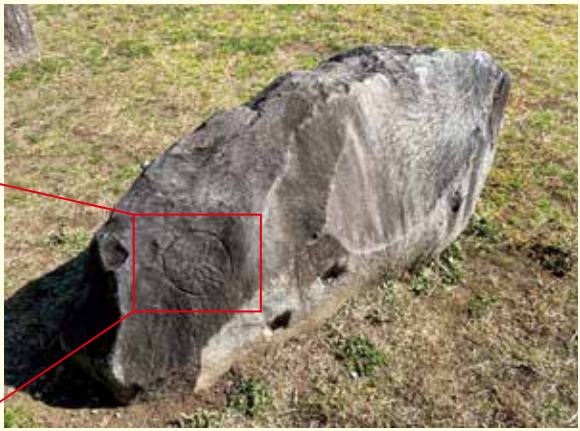


写真23　「三ツ葉柏」紋が刻まれた石垣（弁財天曲輪ポケットパーク）

４　小田原城と地震

小田原周辺は、はるか昔からたびたび大地震に見舞われてきました。記録に残っているマグニチュード６以上の大地震は江戸時代に９回も発生し、その度に小田原城や城下は大きな被害を受けてきました（小田原市 2001b）。地震による被害の状況は、発掘調査でも確認することができます。

寛永10年３月１日に発生した寛永小田原大地震は、小田原城や櫓のほか、城内の建物も残らず潰れたと記録され、御用米曲輪の調査ではこの地震による地割れを調査区の広い範囲で検出しました（写真25）。地割れは南北方向に走り、その直上には整地のための盛土と考えられる土層の堆積が確認できます。この盛土は本丸と御用米曲輪の間にあった曲輪を崩したもので、整地作業は地震の翌年に控えていた家光の上洛に備えて急ピッチで行った復旧事業の一環と考えられます。

元禄16年11月22日、小田原は再び大地震に見舞われます（元禄小田原大地震）。この地震は江戸時代に起きた地震の中でも最大級のもので、天守をはじめほとんどの建物が倒壊し、城下を含め火災は一昼夜続いたと記録されています。

常盤木門周辺で行った試掘調査では、焼土層と瓦集中を検出しましたが、これは元禄小田原大地震で常盤木門が焼失した際に形成されたものと考えられます（写真26）。二の丸馬屋曲輪の馬屋跡や大腰掛でも焼土層とともに被熱した瓦が出土し、火災の被害の大きさを伝えています。

天明２年（1782）の大地震では、天守は倒壊を免れたものの、北東方向に30度傾いたといいます。お抱え大工の川辺音右衛門がそのまま引き起こせばよいと述べ、天守に綱を掛けて小峰の平地（小田原競輪場）から延3,500人が引っ張り、引き起こしたそうです。

写真25　寛永小田原大地震による地割れ

写真26　常盤木門周辺で検出された焼土と瓦集中

Ⅳ　近現代の小田原城

1　小田原城の廃城と新たな活用

江戸幕府の防衛拠点としてその威容を誇っていた小田原城も、度重なる地震や数度の暴風雨により城内の建物の多くは大破し、それを補修するだけの財政力は幕末の小田原藩にはありませんでした。そこで、明治３年（1870）閏10月、藩知事大久保忠良は、明治政府へ「小田原城廃城」の願書を提出し、小田原城の廃城が決定しました。政府の許可を受けた小田原藩は、翌11月には天守、二の丸、三の丸の櫓などを高梨町の平井清八郎に金900両で払下げ、ここに小田原城の歴史は幕を閉じました（写真27）。小田原城の廃城は明治６年に政府が定めた廃城令（全国の城郭の存続や廃止など処分について定めたもの）よりも３年も前の事でした。

解体後の小田原城は城地と建物が陸軍省の管轄となり、藩主の居館であった二の丸御屋形は、藩知事大久保氏が小田原を離れたのち、一部取り壊しや修理が行われたうえで足柄県の県庁となりました。また解体直後から二の丸堀は埋め立てられ、田畑の開発や耕作が進められ、のちに本丸や二の丸も田畑として開発されていきました。

一方で、明治26年に大久保家を顕彰する意味を込め、旧本丸天守台に大久保神社

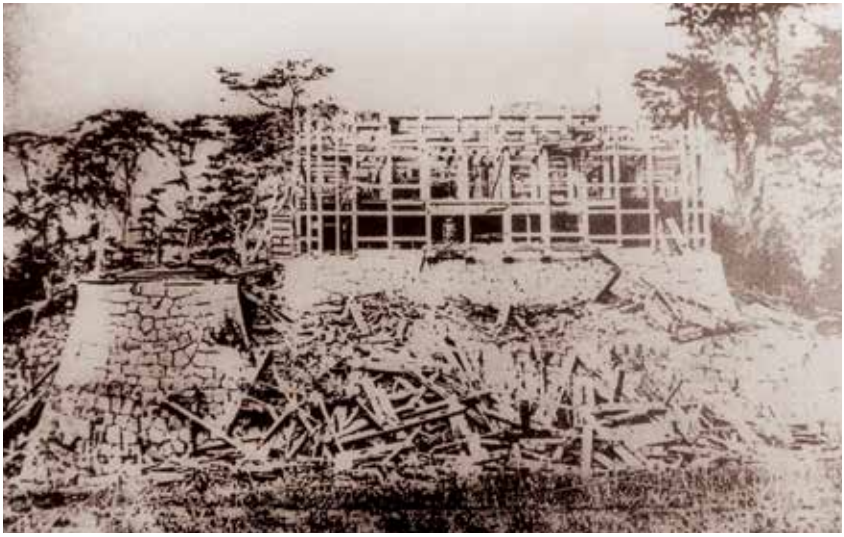


写真27　解体の進む小田原城（小田原城天守閣蔵）

が創建され、明治34年には、明治天皇の皇女である常宮（つねのみや）・周宮（かねのみや）両内親王が小田原の気候・風光を気に入られたのを機に、二の丸に御用邸が建てられました。これにより本丸および二の丸は宮内省の管轄となり、御用邸の敷地として使われました。御用邸敷地内の城跡整備も宮内省によって進められ、明治42年に二の丸東南隅の平櫓の修築工事が行われました。

大正12年（1923）、関東大震災により小田原城は天守台をはじめ、江戸時代の姿を残していた各曲輪や堀の石垣はほぼ全て崩壊し、修復された二の丸平櫓も櫓台の石積みとともに完全に倒壊しました。御用邸も倒壊し、震災後に廃止されました。

震災により小田原城は壊滅的な被害を受けました。その復興を兼ねて城跡の新たな利用が計画され、昭和４年（1929）に小田原高等女学校（旧県立城内高等学校）及び小田原第二尋常高等小学校（旧市立城内小学校）、昭和８年に町立図書館（現二の丸観光案内所）が建てられました。また、昭和20年に県立婦人公共職業補導所（現小田原市郷土文化館）、昭和34年に星崎記念館（旧小田原市立図書館）が建設され、昭和24年には御用米曲輪に市営野球場がつくられました。その後も昭和25年には市制施行10周年記念事業として「こども文化博覧会」が本丸で開催され、天守台の西側一帯の屏風岩にこども遊園地、本丸全体に動物園がつくられるなど、城跡の適切な利用とは言い難い土地利用が進められていきました。

コラム　関東大震災で崩れた石垣

大正12年９月１日に発生した関東大震災では、天守台をはじめ、曲輪や石垣、櫓などがことごとく倒壊しました。御用邸も全ての建物が崩壊し、老松は大半が倒れ、邸内各所の亀裂から水が噴水のように噴き出したという記録が残っています。

地震発生から100年が経過し、小田原城は大部分が修築されていますが、星崎記念館（旧小田原市立図書館）の前には滑り落ちるように崩れた本丸の石垣がそのままの状態で残されています。地震の大きさを伝える貴重な遺跡です（写真28）。

写真28　関東大震災で崩れた本丸石垣

２　天守閣の復興と小田原城の整備

小田原城では、昭和の始め頃までに二の丸周辺の堀の石垣の復旧、二の丸主部の南東隅の平櫓の再建など、震災復興を兼ねた復旧が進められました。しかし積み直された石垣は往時の高さよりも低いなど、城跡としての復元的整備とは異なり、城郭の偉容は感じられないものでした。

写真29　再建中の小田原城天守閣
（小田原城天守閣蔵）

そのような中で、小田原城天守閣を再建しようとする動きが市民の中で起こり、昭和30年、関東大震災で崩れたままになっていた天守台石垣の石積み工事が行われました。令和４年に天守閣の石垣の下で行った試掘調査で、この時の石積み工事の跡が見つかり、石垣を最下段の根石から積み直していることが明らかとなりました。その後、天守閣復興の機運が高まり、市制施行20周年記念事業として、昭和35年に天守閣が竣工となり（写真29）、続いて昭和46年に常盤木門が再建されました。

昭和58年『史跡小田原城跡本丸・二の丸整備基本構想』の策定を受け、本格的な史跡整備が始まりました。江戸時代末期の城の構造や曲輪の配置などが理解できるように整備することを目標に掲げ、発掘調査成果や絵図、古写真などを根拠に住吉掘の石垣及び住吉橋、銅門、馬屋曲輪、馬出門の復元整備が進められました。

こうして小田原城の廃城から約140年の時を経て小田原城の正規登城ルートの歴史的景観がよみがえりました（写真30）。現在は御用米曲輪の発掘調査を進めており、今後も往時の小田原城の姿が明らかになっていくことでしょう。

写真30　復元された正規登城ルートの景観

		和　暦	西　暦	事　　項
中世		康正２年頃	1456頃	大森氏が小田原城に居城する
	小田原北条氏	明応5 ～ 永正元年頃	1496 ～ 1504頃	初代伊勢宗瑞が小田原城を支配下におく
		永正15	1518	２代氏綱が宗瑞より家督を継ぐ
		大永3	1523	氏綱、伊勢から北条に改姓する
		天文10	1541	氏綱没し、３代氏康が家督を継ぐ
		天文20	1551	南禅寺の東嶺知旺、小田原を訪れた様子を「明叔録」に残す
		永禄2	1559	４代氏政が家督を継ぐ
		永禄4	1561	氏政、小田原城に侵攻した長尾景虎（上杉謙信）を退ける
		永禄12	1569	氏政、武田信玄の小田原城への侵攻を退ける。追撃を試みるも退却を許す（三増合戦）
		天正元年	1573	室町幕府が滅亡する
		天正8	1580	５代氏直が家督を継ぐ この頃、小田原城天守が築かれる
		天正15	1587	小田原城の大普請が始まり、総構（大構）が構築される（相府大普請）
		天正18	1590	小田原合戦 北条氏が豊臣秀吉に小田原城を明け渡す 大久保忠世が小田原城主となる（約4万5000石）
	前期大久保氏	文禄3	1594	大久保忠隣が城主となる（約6万5000石）
江戸時代		慶長8	1603	徳川家康、征夷大将軍となる（江戸幕府の成立）
		慶長19	1614	２代将軍秀忠、小田原城に到着し、二の丸に宿泊する 忠隣が改易され、小田原城は幕府管轄の番城となる
	番城			
	阿部	元和5	1619	阿部正次が藩主となる（約5万石）
	番城	元和9	1623	再び番城となる 小田原城を２代将軍秀忠の隠居城とする計画が立てられる
	稲葉氏	寛永9	1632	稲葉正勝が藩主となる
		寛永10	1633	小田原城の修築が始まる 寛永小田原大地震により修築中の城と城下に大きな被害が出る
		寛永11	1634	３代将軍家光が上洛途中に小田原城に宿泊する
	後期大久保氏	延宝3	1675	小田原城の修築が完了する
		貞享3	1686	大久保忠朝が藩主となる（約10万3000石）
		元禄16	1703	元禄小田原大地震により小田原城は天守を含むほとんどの施設が倒壊・焼失する
		宝永3	1706	小田原城天守が再建される
		天明2	1782	天明小田原大地震により小田原城天守が傾く
明治		嘉永5	1852	小田原海岸に３基の台場が築かれる
		慶応4 ～ 明治元年	1868	戊辰戦争が始まり、明治新政府が成立する
		明治2	1869	版籍奉還により、藩主（大久保忠良）は知藩事となる
		明治3	1870	小田原城の廃城が決定し小田原城の天守・櫓などが売却され、のちに解体される
大正		明治26	1893	解体された小田原城の天守台に大久保神社が建立される
昭和		明治34	1901	二の丸に小田原御用邸が完成する
		大正11	1923	関東大震災により天守台、本丸、二の丸の石垣が崩落（御用邸も廃止となる）
		昭和4	1929	二の丸に第二尋常高等小学校（旧城内小学校）が建てられる 二の丸（馬屋曲輪）に小田原高等女学校（旧小田原城内高校）が建てられる
		昭和13	1938	二の丸及び三の丸・総構の一部が国史跡に指定される
		昭和34	1959	本丸と残る二の丸の大半が国の史跡に指定される
		昭和35	1960	市制20周年記念事業として小田原城天守閣が復興される

第10図　本書に関連する年表

文　献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。小田原城本丸・二の丸をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

大島慎一　1993　『史跡小田原城跡　二の丸中堀Ⅰ』小田原市文化財調査報告書第45集　小田原市教育委員会

大島慎一　1994　『史跡小田原城跡　二の丸中堀Ⅱ』小田原市文化財調査報告書第48集　小田原市教育委員会

大島慎一　1995　『史跡小田原城跡　二の丸中堀Ⅲ』小田原市文化財調査報告書第57集　小田原市教育委員会

小笠原清　1990　『1枚の古い写真』小田原市立図書館

小田原市　1995　『小田原市史　別編　城郭』小田原市

小田原市　1998　『小田原市史　通史編　原始・古代・中世』小田原市

小田原市　1999　『小田原市史　通史編　近世』小田原市

小田原市　2001a　『小田原市史　通史編　近現代』小田原市

小田原市　2001b　『小田原市史　別編　自然』小田原市

小田原市　2003　『小田原市史　別編　年表』小田原市

小田原市教育委員会　1984　『史跡小田原城跡　城米曲輪　史跡小田原城跡整備に伴なう予備発掘調査概要報告書』小田原市文化財調査報告書第15集　小田原市教育委員会

小田原市教育委員会　1990　『小田原城とその城下』小田原市教育委員会

小田原市教育委員会，小田原城天守模型等調査団　2017　『小田原城天守模型等調査研究報告書』小田原市文化財調査報告書第183集　小田原市教育委員会

小田原城天守閣　2013　『よみがえる小田原城　史跡整備30年の歩み』小田原城天守閣

小田原城天守閣　2016　『小田原城天守閣展示案内』小田原城天守閣

金子皓彦　1980　「小田原市小田原城評定所曲輪跡の調査」『第4回神奈川県遺跡調査・研究発表会　発表要旨』第四回神奈川県遺跡調査・研究発表会準備委員会

佐々木健策　2024　『戦国期小田原城の正体「難攻不落」と呼ばれる理由』歴史文化ライブラリー584　吉川弘文館

佐々木健策ほか　2016　『史跡小田原城跡　御用米曲輪　発掘調査概要報告書』小田原市文化財調査報告書第179集　小田原市教育委員会

諏訪間順ほか　2010　『史跡小田原城跡　馬出門』小田原市文化財調査報告書第155集　小田原市教育委員会

諏訪間直子ほか　2014　『史跡小田原城跡　馬屋曲輪』小田原市文化財調査報告書第159集　小田原市教育委員会

中野敬次郎　1969　『小田原近代百年史』形成社

小田原の遺跡探訪シリーズ20

小田原城本丸・二の丸

― 遺跡からたどる場の変遷 ―

令和7年(2025)3月7日　発行

編　集　小田原市教育委員会

発　行　〒250-8555　小田原市荻窪300番地

電　話　0465－33－1715

URL：https://www.city.odawara.kanagawa.jp

E-mail：bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印　刷　有限会社 石橋印刷